

審美的歯冠色に対する肌の色と状態の影響

¹九州歯科大学口腔機能学講座口腔保存治療学分野

²九州歯科大学歯学部歯学科

○鷺尾絢子¹, 阿部美月², 金田彩花², 小崎颯太², 北村知昭¹

Effects of skin color and skin condition on aesthetic tooth crown color

¹Division of Endodontics and Restorative Dentistry, Department of Oral Functions,

²School of Dentistry, Faculty of Dentistry,

Kyushu Dental University

○WASHIO Ayako¹, ABE Mizuki², KANADA Ayaka², KOZAKI Sota², KITAMURA Chiaki¹

【目的】

歯の治療では機能性と審美性の回復が共に強く求められており、疼痛除去、感染・炎症の除去、機能回復に加え、審美的満足が得られて患者は心身共に健康な状態を取り戻す。歯の審美的要素の1つである「歯冠色」に対して不満を感じている患者は多く、「白い歯」になることでポジティブな心理状態になることが報告されている(西村ら, 2006)が、歯冠色を単純に白色にすれば顔貌の審美性が向上するとは言えない。顔貌の審美性は歯冠色だけで決定されず顔全体の調和によって影響を受け、同様に、歯冠色は肌の色、加齢による肌の状態(皺など)、口唇・目・髪の色に影響を受ける。しかしながら現状では、個々の患者顔貌に適した歯冠色を決定するのに有用な判断基準はない。本研究の目的は、審美的な歯冠色に対する認識、および肌の色・状態と調和のとれた歯冠色の認識について調査し、肌の色と状態が歯冠色の審美性に及ぼす影響を明らかにする上での基盤を構築することである。

【方法】

本研究の主旨などに理解と同意を得た九州歯科大学教員・医員・研修医・職員・大学院生・学部学生・九州歯科大学附属病院保存治療科を受診した患者の368名を対象とした(九州歯科大学倫理委員会 承認番号: 23-13, 23-18)。

＜方法1＞審美的な歯冠色の認識を明らかにするために、明度で並べた VITA classical shade (VITA 社)を用いて、対象者に「美しい」歯冠色と「白い」歯冠色の調査を行った。

＜方法2＞photo AC (AI 人物素材ベータ版) の実在しない人物のフリー素材画像を使用し、Photoshop で肌の色(明度)・状態(20代～80代相当の肌状態)と歯冠色(方法1で最も回答率が多い「美しい」歯冠色と「白い」歯冠色)を加工した。肌の色・状態と調和のとれた歯冠色の認識を明らかにするため、加工した画像を示し、肌の色・状態と歯冠色の調和がとれているものの調査を行った。

【結果】

調査対象者の内訳は、性別は男性 46.7%・女性 53.3%、年代は 10代 5.7%・20代 54.1%・30代 16.6%・40代 12.8%・50代 8.4%・60代 1.9%・70代 0.5%、職業は歯科医師 33.4%・歯科衛生士 4.6%・22.6%・歯科医師を除く教員 1.9%・医療関係者 4.9%・歯学部学生 47.3%・その他 7.9%であった。

＜結果1＞美しい歯冠色として「C1」を、白い歯冠色として「B1」を回答する割合が多かった。

＜結果2＞美しい歯冠色「C1」相当色に対しては標準的な肌の色を、白い歯冠色「B1」相当色に対しては明度の高い肌の色を調和がとれていると回答する割合が多かった。また、肌の色は同じであっても、美しい歯冠色「C1」相当色に対しては 60代相当の肌状態を、白い歯冠色「B1」相当色に対しては 20代相当の肌状態を調和がとれていると回答する割合が多かった。

【考察】

今回の結果より、「白い」歯冠色が「美しい」歯冠色であるとは限らないこと、「肌の色・状態」は審美的な歯冠色の選択に重要な要素となることが示唆された。

【結論】

患者の審美的 QOL の向上において、歯科医療専門職は個々の肌の色・状態と調和のとれた歯冠色を患者へ提示する必要がある。